インタビューという行為とライフストーリー
—自己の語られ方と相互作用—

桜井　厚

本稿は、2009 年 5 月 22 日にお茶の水女子大学で桜井厚氏が行った同題の講演（お茶の水女子大学言語文化学研究会主催）をもとに加補筆・再構成したものである。当日の司会は半原芳子（AOTS 海外技術者研修協会）、録音の文字化は鈴木（清水）寿子（お茶の水女子大学大学院生）が担当した。

0. はじめに：司会による講師紹介

司会：本日はご多忙のところお集まりくださいましてありがとうございます。本日司会をいたします半原と申します。よろしくお願いいたします。

近年、日本語教育界において質的研究の意義とその重要性が認められるようになってまいりました。しかし、実際にインタビューやライフストーリーという手法を試みようとすると、その仕方がわからなかったり、そもそもインタビューという行為は何なのかと疑問に立ち止まってしまう、そういった経験を皆様もお持ちだと思います。今日は、桜井厚先生をお招きし、インタビューとは、ライフストーリーとは、という点についてお話をいただくことになっています。桜井厚先生は現在、立教大学社会学部の教授でいらっしゃいます。ライフストーリー、ライフヒストリー研究の方法論を基礎に、差別や環境などの社会問題や、近現代史の人々の経験を読み解く調査を行っていらっしゃいます。『インタビューの社会学』『ライフストーリー・インタビュー』といったご著書がございます。それではさっそくご講演の方を始めていただきたいと思います。先生よろしくお願いいたします。

1. ライフストーリーの歴史

1.1 ライフヒストリーからライフストーリーへ

桜井：こんにちは、桜井と申します。よろしくお願いいたします。初めて今日はこういう形で、日本言語文化学研究会でお話をすることになりました。小さい会で和気あいあいと話ができればいいなというぐらいの気楽な感じで引き受けたんですが、こんな多くの方[1]がいらっしゃるとは全く思っていなかったのでちょっとびっくりしております。

今日は非常に簡単なものですがお手元のレジュメ[2]に合わせて話を進めます。

社会学あるいは文化人類学、それから歴史学におけるオーラルヒストリーですね、いわゆる口述と言いますか、インタビューを通して人の語りを聞いていくことを中心にして研究をまとめていこうという動きは古くからある方法ですが、今日のように注目されるようになったのはまだ歴史が浅くて、わが国では 10 年にもなっていない部分ってあると思います。今も方法論としてマイナーではあるのですが、最近は社会学ではずいぶん理解されるようになりました。

例えばですね、口述に客観性があるのかという話があります。今までは、「5 人以内の語りぐらいで事例の語りをまとめてそれで論文の客観性が保障できるのか」なんて話がありましたが、最近はそうした質問はなくなりました。だから認知されてきていると私は思っているわけです。ただ、他の分野ではいまだにその辺の議論はあるようで、特に医療系では、ある種の客観性が非常に強い分野ですから、やはりこの問題はいつも蒸し返される、という状況があります。そんなことで、社会学のほうでは少しずつ認知が広がってきているかな、というのが私の現状の認識でございます。ライフストーリーという言葉自体は、2000 年を過ぎてから比較的ポピュラーになったといっていいと思いますね。それまでは、われわれは、「ライフヒストリー」と言っておりました。

社会学というのは集団を扱うんですね。社会一般を扱う。ですから、個人を対象としているだけではダメなんですね。そこで、一般的にはアンケート調査のようなことをします。理論をもとにした仮説検証型の調査が代表的なイメージなのですが、いわゆる意識調査などをします。意識調査をするというのは、「○○についてどう思いますか？」あるいは「こういうことをしましたか？」と質問することで、行為とか、ある意識のあり方のある部分を切り取るわけですね。そして、それをマスで括るわけです。つまり、A さ

んとBさんとCさんがこういうふうに言った、というAさん、Bさん、Cさんそれぞれの全体像を聞き取るのではなくて、非常に単純に言ってしまうと、例えば投票行動であれば、Aさんの行為、Bさんの行為、Cさんの行為を見て、この行為だけで何パーセントが投票に行ったとかね、賛成投票したとかね、そういうふうにまとめていくわけですよね。だから基本的に、個人ではなくて一つひとつの行為というもので切ってきたんですよね。

1.2「語り」を通して人間を見る

ところが1980年の終わり、90年代になりますと、新しい動きが出てきます。一つは、今のような行為のとらえ方に「これちょっとおかしくないか」と疑問がでてきました。同じ行為をしたとしても、AさんはBさんとは違って、Aさん自身の人生の中の一つの行為としてそれを行っている。つまり、この流れを見なければいけないんじゃないかという考え方が、一番早いものでは1970年代の終わりに出てくるわけです。いわゆる生活構造などの生活の全体を見なければいけない、あるいは人間をトータルに見なければいけない、という考え方です。すなわちAさんは一日の生活の一貫した行為の流れを持っている。あるいは、自己の人生をこういうふうに位置づけしているんだと、そうした自己と人生、生活の関係と構造をトータルで見ていきましょう、というわけです。それがライフヒストリーという見方だったんです。これは昔からある方法ではありましたけれどね。

もう一つ、皆さんの研究会のまさに“言語文化”というところとの関連ですが、その“言語行為”の見方です。“この社会、文化のあり方は言語によって構築されている”という言語論的な見方が80年代以降、盛んになりますよね。一般的にはそれを、構成主義ともいいますし、あるいは構築主義ともいいます。つまりそれは、われわれのなにか実体があって、そして、それの反映として意識されるのだという見方に対する疑問ですね。むしろ言語で表現する行為をとおして、その現実がつくられるんだという見方ですね。

まあ具体的に言いますとね、これまでの見方はこうなります。語り手がここにいるとして、その人はジェンダーでいえば女性である、また被差別者である。そういうマイノリティの位置づけがあるとすると、この語り手は“差別を受けた”と語るはずであるし、聞き手からは語ることを期待されているわけです。アンケート調査をしたら、属性というのが前提ですよね。これをまず基本にして、何歳の人はこういう意識を持っている。女性と男性はこういうふうに違う、というふうに決めますよね。それと同じように、この属性を前提にして、この語りが生まれているんだという。基本的に語りがその属性の人が実体としてもっているものなんだと。

本質というものがあって、それをつかまえるんだ、というのが今までの考え方。ところが、構築主義の考え方は、非常に簡単に言ってしまうと、言語というものを介して相互行為をすることで、女性とかマイノリティとか、さまざまな位置づけがなされるんだと、言語行為から捉え返していく。ということで、属性そのものも本質ではないのだと。だから、ジェンダー論で、お茶大には竹村和子さんとかいらっしゃいますが、ジュディス・バトラー（Judith P. Butler）とかそういう人になるともっと複雑になるんだけれども、基本的には言語活動、相互行為のやりとりを通して、語り手の属性なり実体、あり方が見えてくるんだというふうな捉え方が出てくるわけですよね。これはまさにその、ケン・プラマー（Ken Plummer）が『セクシュアル・ストーリーの時代』のなかで言ったホモ・ナランツと言いますかね、言語行為というか、語るのが人間なんです。語ることによって自己というものが生成されるというような考え方ですね。そういう認識論の大きな変化がありまして、語りというものが焦点になってきた。で、ちょっと大雑把に言いすぎかもしれませんが、これがいわゆる物語論につながってきている流れである、というふうに考えています。

だから、私の場合はライフヒストリーという個人を対象にするものから、その“語る”ということにポイントを置く形でライフストーリーというふうに呼び始めたんです。ただ、海外の文献はすでにもう普通にストーリーという言葉を使っていましたが、日本ではそんなに言われていなかったんです。最近だと思います。われわれの業界と言いますか、関連領域でもライフヒストリーという使い方はだんだん少なくなりました。ライフストーリーという言い方がわりと普通になってきたのが、現状だと思います。

ただし、勘違いしないでほしいのは、「ある個人のライフヒストリーは」という言い方は当然あるんですね。この人がライフストーリーとして、自分のライフヒストリーを語る、という言い方はあるわけです。つまり自分が生きてきた人生を「自分のライフヒストリーだ」ということは可能なわけですから、ライフ

ヒストリーとライフストーリーとはイコールではないというのが私の考えなのですが、ちょっと混乱がある、というふうに思います。ライフヒストリーはライフストーリーにすべて置き換えられる、ストーリーという言語的に表されたものが、その人のライフヒストリーなんだ、という言い方からすれば、それはたしかに当てはまるんですが、それは結構難しい。いや、その人の人生は語りとは別にあるじゃないか、って考えると、ライフヒストリーとなるわけですね。だからその辺はやっかいなので、本当にイコールなのかは、検討の余地があるというふうに思っています。ちょっと込み入った話ですが。

1.3 ライフストーリーは相互行為で生み出される

私自身は理論家ではありません。フィールドワーカーなんですね。現場へ行って、人から話を聞くことを一貫してやってきました。

ライフヒストリーというのは、個人的な記録、自伝や日記などを資料として使うこともあるんですが、私は基本的にずっと聞き取りをしてきた人間です。そこで、インタビューを終えると、語ってくれた人の語りをわかりやすく伝えようとして、まず語ってくれたことをもちろん書き起こすわけなんですが、そうしたトランスクリプトを作って、それをわかりやすくするために、最初のころは、例えば時系列の順序に並べ替えるなどのエディティングをしました。私はインタビュアーとしてそこに参与しているんだけども、私が言っていることはなるべく省いて、その人が語ってくれたことを中心に編集しました。

でも、これではダメだとあるとき気がつくわけです。それは、ライフストーリーという考え方が基本になってきたときと重なるわけですが、このライフストーリーを構成するのは語り手だけではない、聞き手のインタビュアーとのやりとりの中で出てくるんだということがわかるんですね。つまり、語り手がいて、調査協力者のことですが、昔はインフォーマントと呼びましたが、この人が何か情報、この場合はある種の経験をもっているのでインタビューすると、それを提供してくれる。こういう考え方で最初はインタビューをしていたわけです。ところがそうではなくて、語り手があらかじめもっているのではなくて、インタビューという相互行為をして、そこからライフストーリーが生産されるんだ、という。まさに相互行為から生み出されるものがライフストーリーなんですね。

それは単純なことなんです。トランスクリプトを作成すれば一目瞭然、つまり、インタビューの逐語起こしを見れば、「ここでこれを聞いておかなきゃいけなかったな」あるいは、「何でここで、その話題をやめちゃったの。もっと聞かなくてはいけなかったのでは？」という話になるんです。

1.4 その人の人生を含めて聞く

私は関西の被差別部落の研究をずっとしていましたが、最初に共同のプロジェクトとして、地元の高校の先生を中心に、少しライフヒストリー、あるいはライフストーリーという考え方である部落を研究調査しようとしていました。そのときに、インタビューのトランスクリプトを作りまして、それを皆で見ながら、「このインタビューおかしいんじゃないの？」と、まさにインタビューの仕方を研究しました。それはなかなか面白い経験でしたね。最初は、「どんな聞き方すればいいの？」と手探りで入ったわけです。

後からの話にも出てきますが、例えば、被差別の人たちに話を聞こうとすると、一番聞きたい、最初に聞こうとする考えは何かというと、被差別体験なんですね。「こんなひどい目にあった」、これを聞きたいわけです。だからそのためにさまざまな手法を編み出していくわけです。ストレートになかなか聞けないわけですから、例えば「つらいと思われた経験ありますか？」と聞いてもなかなか出てこないんですよね。本人がしゃべってくれればいいんですが、なかなか出てこないとそういう聞き方になりますよね。そういうような構えを持ちながら、われわれは最初はやっていたんです。でも、「それはおかしいんじゃないか？」という話になって。もっと自由に聞いていく必要があるんじゃないかというような疑問が出てくるわけです。あるいは、そういう差別体験の話じゃないところに、まさにその人たちが生きてきた証というのが見えてくる、ということがあるんじゃないか。

そういう意味で、ライフヒストリーというのは、あるテーマで聞くんじゃなくて、その人の人生を含めて聞くということなんです。しかし、いま申し上げたように、われわれがインタビューをしていくと、どうしてもある構えで聞いていきますので、あるデータだけが見えてくることが起こりました。まあそれは共同研究をやりながら、「おかしいんじゃないの？」というようなことをやって、修正していくプロセスを最初踏んだわけですね。そういうなかで、ほんの数人ですけれども非常に聞き取りの上手な人たちが、そこから育って、そのままずっとその後の研究も続けていったという状況があります。

いきなり本題に近いところの話をしているんですが、そういうふうにして、ライフヒストリーからライフストーリーに変わったということによって、実は、聞き手として、インタビュアーがデータのなかに登場してくるようになりました。これが画期的に変わったことです。だから単純に、私の場合は名前が変わったということではなくて、まさにその調査のやり方が変わったんですね。明らかにデータの中身が変わったんです。それから、時系列に並べるというやり方もやめました。語りの流れを全部そのまま起こして

いく。ご本人に見せたりしますから、少しわかりやすくはします。逐語起こしだと大変言葉がわかりにくいということはありますから、多少見出しをつけたりとか若干の編集、工夫はいたしますけれども、その通りに見せます。そんなふうにして私の場合は、ライフヒストリーからライフストーリーに流れが一つできてきたというわけですね。

1.5 聞き手としての自分が対象になる

まだレジュメの中に入っていないんですが（笑い）もう一点。こういうふうにして、インタビュアーという、調査する自分が登場してくるという流れというのを考えますと、こういう言い方がいいのかどうかわかりませんが、面白いことがあります。簡単に言うと、調査の失敗談というのも、論文になるってことです。うまく聞けない、聞けていない自分というのが研究の対象になります。だからちょっと得ですよ。無駄がない（会場笑い）。

ダメなものはダメなんですけど、自分自身がどういうふうに、相手とやりとりをしているかということ自体が対象になるので、一つは、インタビュー自体が研究対象になるという新しい課題。それから、例えば、向こうがあまり語ってくれない場合でも、その原因は語り手にあるのではなく聞き方にあるのではないか、すなわち、自分がどんなふうな聞き取りをしているのかということを、検討する余地があるんですね。

そうした観点は、まあリフレクシブ【reflexive】というふうな言い方をしますけれども、インタビューの互いにやりとりのなかから見えてくる、相互的な反映というようなものが、非常に重要な位置を占めると考えられます。だから、そういう意味で、語りというものが持っている特徴が、理論的な考え方だけのものではなくライフストーリー・インタビューという具体的なプロセスを通して見えてくるんじゃないかと思っていますので、ちょっとその点を頭においていただきたいと思います。

2.相互行為としてのライフストーリー

2.1 リアリズム・アプローチとナラティブ・アプローチ

ライフストーリーというのは平たくいえば、その人の一人ひとりの個人の全体というものを見ていくというか、インタビューで聞いていくということになりますね。

では、質的研究法にはどういうアプローチがあるか。質的研究のアプローチというのは、皆さん関心がおありなんだと思いますが、昔からある質的研究法といったら、一つは参与観察、現場へフィールドワークに出て行って、そして観察をするという考え方ですね。

データ分析ということを考えますと、一つは、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）、というアプローチがある。これは今、医療系では非常によく使われます。これは日本で比較的よく紹介しているのは木下康仁さん、実は立教の同僚なんですね。研究室がすぐそばなんですが、彼がやっています。

それからもう一つはたぶん、こういう物語論、ライフストーリーだと思っています。もちろん、あと一般的な文献研究とかありますよ。ただ、こういう人の話を聞いてね、それをデータにしてまとめていくというやり方は、そのなかの一部にライフストーリーを使っているような、広い意味でのエスノグラフィーなどがもっともポピュラーですね。

さて、口述データというものを取ってきて解釈していくこうした方法論の前提に、次のような二つの見方があります。

・リアリズム・アプローチ：解釈的客観主義（whats）
・ナラティブ・アプローチ：対話的構築主義（whats＋hows）

リアリズム・アプローチと、ナラティブ・アプローチ。大きく分けて、この二つというふうに私は考えています。私が最初のほうに使ったのは「解釈的客観主義」という言葉です。それから、「対話的構築主義」という言い方で書いたものが、ナラティブ・アプローチにほぼ相当するかな、と思っています。解釈的客観主義とはどんなことかというと、語られたデータを解釈して数量の多寡でまとめるというよりは、解釈して、しかしながら客観的であろうとするために、ある一定量のデータを集めて仮説を練り上げていくことを基本にします。ですから、そういう質的データを、ある程度の数を集めて、そこからほぼ妥当するものを見つけ出すということですね。GTA の考え方の基本はそれです。ライフストーリーでもこういう考え方が一般的でした。

じゃあ何人のデータを集めればいいんだ、というのはライフストーリー研究を始めたときに出てくる質問です。社会学では最近はそういう質問がなくなってきたと先ほどもちょっと申し上げましたが、まだ、一般的にはよく出てきます。これについていろんな考え方がありますが、まず、あまり誰も疑問を差し挟まなくなる数字が、20 例以上です。経験的にわかっている。フランスの社会学者ダニエル・ベルトー（Daniel

Bertaux）によると、いくつかの事例を通してある小さい仮説が一つずつ出てきますね。で、仮説を修正しながら、20 例以上集めていくと、ほぼその仮説を修正する必要がなくなるような状態になる。これを「飽和する」という言い方をする。サチュレート【saturate】すると言うんですね。それがだいたい 20 例、25 例くらいっていう数字が挙がっているんですよ。だいたい 20、30 の間なんです。これが、解釈的客観主義の一つのスタンスです。解釈をしていく、しかし一つのデータではちょっとまずい。そこで、いくつかのデータを重ね合わせていく。そしてある一定数までいくと、ほぼこの仮説が大丈夫だなって数字に達する。だから常に事例を集めながら仮説を構築していくという流れがあるということになります。

ところが、私が一貫して主張したのは数の問題じゃないんだ、という話です。それをどういうふうに考えたらいいんだろう。たった一人の人の非常に長いライフストーリーの語りでも、充分ある意味ではデータになるんですね。課題の提示の仕方にもよるんですが、一人でもデータとしては妥当なんだ、簡単に言うとそういう考え方です。これを支えているのが、インタビューという相互行為の文脈なんだという考え方です。インタビューがどんなふうに行われるかによって、そのライフストーリーの語られ方、コンテクストというものが見えてくる。したがって、そのコンテクストを抜きに分析はできない、という考え方なんです。

数を集めるライフストーリーでは、GTA が典型的ですが、それぞれの、ある部分を語り、あるいはカテゴリーというもので切片化していきます。切っていきます。だから A さんが語ろうと、B さんが語ろうと、C さんが語ろうと関係ないんです。ある属性の人のこういう語りがある。数量的なデータ、あるいは今までの質的データと同じで、行為とかそういう役割で切っていく。したがってデータの役割は同じなんですね。そうじゃなくて、やっぱりその人がどんな脈略で語りを生み出しているのか。その背景になるのが、まず、インタビューです。その上で、その人の生きている状況があります。社会的なコンテクストがあります。つまりそのローカルな雰囲気、文化があります。それから全体社会、私は個人から社会へは 3 段階あると考えていますが、そういうものを背景にして、語りは生み出されているんだ、というように捉えようとしたわけですね。これは私なりの対話的構築主義というスタンスです。

ところが、社会学の中では理論家はたくさんいますので、このネーミングに対してはさまざまな批判が出ました。一つは構築主義という言葉を使ったがために、その批判が出たわけです。構築主義は厳密にいえば先ほど言った、“本質はない、言語ですべて事実が作られるんだ”、あるいは“人々の属性も作られる”という話ですから、そういうことから考えますと、私なんかのテキストや本の中では、ある種の実体的な前提をもっている側面というのがやっぱり見えちゃうんですね。だからちょっと不徹底なわけです。そういう意味で、構築主義的なスタンスの人からは批判が出ました。

ただ、私はここである程度強調したかったのは何かというと、どちらかというと相互行為という部分でしたから、対話的というところに意味はある程度込めたつもりなんですね。ただし対話といいますと、また、これも語弊がありまして、対話という限りは、人と人の関係性、インタビュアーとインタビュイーの関係が対称関係、つまり平等でなきゃいけないんじゃないか、そうでなきゃ対話にならないでしょう、という批判も出ましたが、基本的にはここで強調しているのは、ある種の相互性で、相互行為を通してライフストーリーが生み出されるんだ、という基本的なスタンスであったわけです。にもかかわらず、私は相互性が大事にされていてストーリーが生み出されている、と言っていても、構築主義から批判されたように、ある現実、実体を前提にしているでしょう、という部分もあります。そして、それはあえて持っているんです。そのことをちょっとだけ言いたい、というのがあるんです。なにしろ理論家ではなくて、人びとの経験を重んじるフィールドワーカーですし、語り手はあくまでも実体があると信じている人たちですから、それを置き去りにした考え方には全面的に賛成しがたい、という思いがある。ちょっと難しい話なんですが。

じゃあ、そのわれわれの語りというのはどういうふうになっているんだろう、と、確認の意味も込めて簡単な構造をお話ししたいと思います。まず、非常にわれわれ言語でコミュニケーションするときに、基本になっていること、例えばものを解釈する時にここが大事だなっていうところがたぶんあると思うんですね。最近学生にこういう課題を出して、ちょっと書いてもらいました。

2.2 会話からライフストーリーへ

以下の親子の会話が適切なコミュニケーションとして成立するように（　　）に言葉を入れなさい。 親：この辺りはホームレスが多いのよね。 子：うん、わかった。（　　）

四角の中を見て下さい。こういうふうに書くと、相互に構築されるとか、意味が確定してくるとか、そういうことがちょっとわかるかなあと思って、これを出してみました。

親子、と既に属性の前提がありますが、コミュニケーションをしています。これが対話としてちゃんと成り立つためには、意思疎通ができているということを前提にして、括弧の中に入れるとしたら、何を入れますか？という問題ですね。

（会場の一人に質問）すみません、どんなふうに入れますか？…（質問の答えを復唱）「うんわかった、今度通ったときに、もうちょっと見てみるね。」あの、あまり私にとっていい学生じゃない（会場笑い）。期待した答えが返ってこなかったのでちょっと残念なんですが、“そうなんだ、今度よく見てみるよ”、っていうのがぴったりだということですね。答えを調整しちゃいけないね（笑い）。どうでしょうか？（違う人に質問）「うんわかった、注意するよ」。今のが期待した答えなんです、すみません。違う答えももちろんあるんですが、われわれはここで、「うんわかった、注意するよ」と言いました。言葉の字句通りであれば、最初の方が言ってくださったように、「うん、今度よく見てみるね」になるはずなんです。だけど、その場合に「うんわかった」、という言い方をするかどうかはわからない。でも「気をつけるよ」、と言った途端にすべての意味が確定していくわけですね。例えばここにあるホームレスというカテゴリーは、この括弧内に言葉が入ることによって、どういうカテゴリーとして成立するかというのが見えてくるわけです。

①メタ・コミュニケーション＝関係
・事例からは「親－子」関係（親：あなたのことが心配なの）
②メタ・言語＝カテゴリー
・事例からは「ホームレス」というカテゴリーの構築性

つまり、二つのメタがここにあって、われわれが常識的に理解するコミュニケーションの構図というのは、この二つのメタを駆使しながら会話をしている。だからいかにもわれわれは、わかったように会話しているけど、実は言葉、言語そのものが指し示したものを指し示しているわけではない。まさにメタの部分として解釈を下して会話をしているわけですね。結局われわれはそうやって、常識なら常識というものを解釈していくわけです。一つのメタは何かっていうと、お二人の方が言ってくださったように、「この辺りはホームレスが多いのよね」、「うんわかった、気をつけるよ」。このコミュニケーションは、親が“あなたのことを心配しているのよ、あなたのことを愛しているから、危なくならないように心配しているのよ”、というメタを発しているわけですね。で、子どもはそれに答えている。一つはそういう関係性のメタがありますよね。

それからもう一つ、ここにある重要なカテゴリーとしての、今言った「ホームレス」というカテゴリー、これにもメタがあります。このホームレスがどんな意味を為すかっていうのは括弧の言葉が入ったことによって成立するわけです。

だからここで「うんわかった、大きくなったら俺、弁護士やるよ」って言ったとしたら、ここの親子は、「最近のホームレスになる人っていうのは非正規雇用の労働者が多くてね」と、そんな話をしているかどうかわかりませんけれども、でもそれはありうるわけですよ。「うんわかった、困っている人を助ける仕事に就くよ」ということを言うかもしれない。そうであればこの「ホームレス」は“社会的な弱者”など、別の意味合いを帯びてくるわけです。結局われわれはそういうふうにして、語りというのを解釈していく作業に従事しなければならない。つまり言葉の問題と関係の問題、この二つの部分をインタビューの中から読み解くという作業が必要になるわけです。ライフストーリーの解釈というのはだいたいこんな感じになっているというのが私の認識です。

2.3 ライフストーリーの構造（会話、ストーリー領域、物語世界）

会話とはどんなものかというと、二人の人、インタビュアーとインタビュイーが出会って、「こんにちは。お元気ですか、どうですか」と挨拶するのが会話と言っていいでしょうね。「おはようございます」と言ったら「おはよう」と言うのが会話です。それに対し、「今日はこういうテーマでお話を伺いたいんです」とインタビューの趣旨説明をして話をし始めるのが、私の言葉でいう、「ストーリー領域」ということになります。ストーリーが生成する基盤となる領域、ということなんですけどね。（下図参照）。

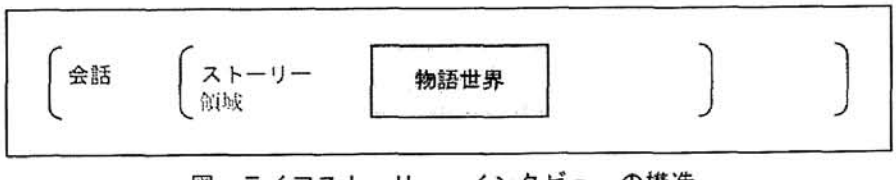


図　ライフストーリー・インタビューの構造

真ん中に「ストーリー領域」と書いてあります。それから、四角の中に入っているのが「物語世界」ですね。これは物語なんですね、これはどういうことかというと、例えば、田舎なんかに行ってインタビューして、「昔、子どものころにはどんな遊びをなさいました？」みたいな話を聞きますよね。すると、「子どもはね、当時はね、こういうところでね」というような話が出てくる。これが物語世界ということですね。これらは実は、リアリティのあり方がちょっとずつ違うんですね。次元が違うんです。これ、インタビューをしていくとすごく面白くて、たぶん皆さんがインタビューをして、それを全部逐語起こししたら、どこから物語、ストーリーが始まって、というのが見えてくる。もちろん、どんどん変わるから見えない場合もありますが、丁寧に見ていくと見えてきます。

昔、私は、ある大学の紀要で、その聞き取りのテープ起こしそのものを載せてもらいました。どこがストーリーでどこが物語か、どこにどういう指標があるか、“何歳のころ”なんていうのは一つの指標ですよね。それを細かく線を引いて、そういう指標を全部分析したことがあります。トランスクリプトそのものを論文でもないのに載せてくれたのはありがたいな、と思ったんですが。まあ、そんなふうにして、語りというのはそういうリアリティの違いからなる構造を持っているというふうに考えていいと思います。

これは普通の日常会話でもそうです。例えば、突然出会った人に「あ、こんにちは」とか「元気？」とか挨拶をして、「あ、昨日こういうことがあったんだよ」とか言って物語が展開していくわけですね。インタビューの時は、「今日お願いしたいんですが」、「何を聞きたいの？」というやりとりがありますから、お互い、一種の緊張関係があります。主導権は、インタビュアーが聞きたいわけですからその人が主導権を取りますよね。だけど物語を語るときには、語り手が自分の物語のコントロールをするわけですから、ある意味では聞き手は、「うん、それで？」という、いわばサポーティブな役割をする。そういう部分があります。それから緊張関係も、語る人は緊張しているかもしれませんが、聞いている方はゆっくりして聞いていいわけですね。次の質問を考えなくていいわけだから。

そんなふうに、実はそのなかでのリアリティのあり方というのは違うんですが、まあいずれにしてもこういう三次元がある。さらにこれは、先ほど言った、メタのコミュニケーションの関係という部分がそのストーリー領域に出てきます。例えば調査をしている人とされている人の関係というのがありますが、だんだんと話をしていくと、関係が変わることがありますね。研究者として入って話を聞いているけれども語り手が慣れてくれば、「あ、お嬢さん」という形で娘のように見て、話をすることもある。あるいは私がお年寄りのおばあさんにインタビューした時は自分の息子のように思われて、話をされることがあった。最初のうちは“どこかの大学の先生”とか言われるんですが、だんだんそれが転換していくような構図がやっぱりあります。こういうは、基本的にストーリー領域でのやりとりの中で見えてくる、と言っていいと思うんですね。

それからもう一つストーリー領域の中で見えてくることがあります。次の事例は、山本佳世乃さんが博論の中で使った事例をそのまま使わせていただきました。例えばある人がこういうことを語っている。

①バスを降りるときに、車イスがバスの扉に挟まってしまったんですけれど、周りの人がバスの運転手さんに知らせてくれて、みんなで車イスを降ろしてくれました。ありがたかったけど、迷惑をかけてもうしわけないような気分になりました。②毎日がこんなことばかりで、自分は周りに迷惑ばかりかけて生きているんだなと思って落ち込むことがあります。（山本 2009）

こういう語りがあります。これは②から以下というのは、ストーリー領域の語りなんですね、というふうに考えます。つまり時空間が違う。その前までは時空間の領域は物語の世界なんです。「当時周りの人に迷惑かけて申し訳ないと思いました」までは。その全体を含めて今の時点で語っているのが②の語りということになります。したがって、これは一つの語りなんですが、自分の評価といいますか、感情というものを込めた語りですよね。

これは非常に重要なポイントで、例えば昔のことを語ってくれたおばあさんが、「今の若い人はいいよね」、「極楽だよね、昔のことを思うと今は極楽だよね」、というような言い方をすることは、私なんかは結構お年寄りに話を聞くことがありますからそういう経験たくさんあります。「極楽だよね、あの時は大変な苦労したんだよ」という話なんですよね。

そういうふうに、ある意味では自分の人生や過去の出来事を評価していく。それは今の時点で話をしている、そういう相互行為の中でやっている評価であるというふうに、捉えることができると思います。ですからこの２つの次元は、私は比較的重要視しているんですが、そんな細かいこと気にしてもしょうがないんじゃないの、と言われそうな気配もあるんですけど、そこから考えてみるといろんなものが見えてくるんじゃないかと思います。

①物語世界（感情を含む）②ストーリー領域（感情、評価）

・「ストーリー領域」①語り手ー聞き手の関係（権力関係）：構造性非対称性（階層、ジェンダー、エスニシティなど）／相互性非対称性　②語りの時点での感情、評価
・「物語世界」におけるカテゴリー：MCD (membership categorization devices)、アイデンティティ形成の基盤

ストーリー領域というのは、語り手と聞き手の一つの権力の関係のあり方を指し示していますし、語っている時の感情とか評価を表している、ということが言えます。

さらに、こういう言い方ができますのでちょっと注意していただきたいんですが、語り手と聞き手の関係が権力関係であると書いてありますが、従来の考え方からいうと、先ほどの語り手と聞き手の関係の中で、例えば語り手の属性、客観的な属性が前提にありますよね。

例えば、通常はジェンダー的に男なのか女なのか、年齢的には高齢者なのか、あるいは、青年層なのかとかね。そういうふうに分けて考えます。それが常識の前提になっています。したがって例えば、被差別者、マイノリティとしておきましょうか、例えばマイノリティの語り手に“大学の教員”がかかわると、“大学の教員”というのはマイノリティ当事者ではない、という場合、一つの権力関係になります。すなわち、社会的にインタビュアーの方が強く、インタビューとしてのマイノリティの方が弱いということになりますね。

じゃあ、その構造というのは変わらないのか。今までは属性というのが非常に重要視されていましたので、非対称な関係が強調されてきました。ただ、私はもうちょっと楽観主義者です。どこが楽観主義者かというと、マイノリティというこの構造的な属性は変わらない。これは変えようがないだろうと思います。ところが相互行為における関係というのは変わるんだと思います。それはなぜかというと、相手とやりとりをしていけば、さっき言ったように、“大学の教員”が“息子”みたいだ、ということになっていくわけです。あるいは、すごく歓待してくれることがあったり、インタビューした経験をお持ちの方はおわかりかと思いますが、そういうことを考えると、単に相手が“大学の教員”であるというレベルで遇されているわけではない。

あるいは、“大学の若い研究者”であるというふうに相手が見ているだけではなく、単純に“娘”であったり、あるいは、これは実際のある学生の経験ですが、「国立大学の学生なら、お国のお金使っているんだから、あんた真面目にちゃんと頑張らなきゃだめよ」と言われたりとかね、現実にあるんですよ、学生がインタビューに行くと。前、千葉大にいたものですから、学生が行った時の話なんですが。そういうふうにして、ある女性は女子学生を勇気づけてくれたとか。そういうことはいろんな形であるわけです。だから、相互行為の中では、どんどん、いわゆる属性は変わっていくことになります。

これを理論化した人もいます。たしか、ラインハルツ（Shulamit Reinharz）だったと思いますが、彼女が自分が調査に入ったときに、長く調査をしているとね、娘であったり、相談者的な役割であったりとか、いろんな役割を自分が負うことになる、と言っています。そういう意味でなんか前提に属性をおいちゃって、そこで切ればいい、という考え方はまずいのではないかと思っています。それは同時にインタビューするときの質問の仕方にも表れてくる。

常に自分が相手を被差別者として見ている限りは、どうしたって被差別体験のことを聞きたいんです。だけど、今、例えば学生に「どういう人に話を聞きたいですか？」と聞くと、例えば在日の外国人の人とか、いろんなマイノリティの対象者が話によく出てきます。それに対して、ある学生は、「そんなイメージの悪い悲惨な話はあまり聞きたくないんだよね、もっと楽しい話を聞きたいんだよね」と言うから、「いや、そっちのほうが楽しい話がもっと出てくるよ」と私が言うわけですよ。実際そういうことは多いわけです。だから、構造的なマイノリティが、語りもすべてそれに沿って被差別の悲惨な話が出てくると、われわれはゆめゆめ考えてはいけないと思っています。だからこそ、ライフストーリー研究がある。ライフを聞く、ということが非常に重要だと思っています。だからまあ、人間の付き合いをずっとやっていく、という流れがここにはあると。しかしもちろん、構造的な非対称性を全く抜きに判断するというのもやはりできないという真実があります。簡単に言うと、構造的な非対称性はあるだろう、しかし、それをある種緩和する、相互的な関係というのもありうるんだということじゃないかと思っています。

それから、次の物語世界を解釈していく流れはいろいろあるかなと思います。だいたいそれぞれのテーマによって違いますので、あまり一概に言うことはできません。ただ、ある種もう少し細かい説明はできるんですが、ただ私、社会学やっているせいでね、ちょっとその傾向が強いんですけれども、やはり物語世界に出てくる登場人物、言ってみれば、社会関係のあり方、つまりその語り手と、そこに出てくる登場人物っていうのはとても重要です。モノももちろん大事ですよ。モノも大事なんだけれども、カテゴリーの中では、対人関係のカテゴリーがどんなふうに登場してくるかというのを見ておく必要があります。な

ぜかというと、生活の基盤とかアイデンティティとか、あるいは何かを、ここは、日本言語文化ということで、日本語教育に絡んで聞いていますが、要するに、例えば外国人が日本語をどういうふうに習得していくか、どういう日本語のカテゴリーが中心に登場してくるか。外国人特有のカテゴリーがすごくたくさんであったりするんですね。

私は一回だけ、千葉大にいた時代に日本語教育の博士論文を書いている人の指導をしたことがあって、それで相談を受けていたときに、その語りが薬とか、医療関係の単語がすごく多いんですよ。なんでかと言ったら、その背景があるんです。病気をしたり、付き合っている人との絡みとか、そういう背景がちょっとある。だから、そういう言葉には異常に詳しかったり、あとは役所用語がありますよね。そういうものを意外によく知っている。普通の日本人はよく知らないような言葉をちゃんと知っていたりする。そんな傾向がちょっとありました。分析までそのときは行かなくて、そういう話をしたことを記憶しているだけで、例えば、カテゴリーというのは、それを支えるのに、何でこの言葉が使われたかというと、単に学校で使用するとか、教育で学習するというだけではなくて、生活実践としてそれを習得して言っているという状況が、かすかですが見えてくる。そんな話をちょっと議論したことがあったことを今思い出しますが、そのなかで、特に背景があるような部分として、メンバーシップカテゴリーというのが大事なんではないかというふうにも思ったりします。

だからそういう装置があるというのは、これはちょっと別の研究（会話分析）から引き出した言葉なんですが、あるいは自分のアイデンティティの基盤のようなものをそこから取り出すことができるだろうと、そういうふうに思っています。

3.語られることと語られないこと

3.1「体験的」語りと「経験的」語り

・life as lived, life as experienced, life as told (Bruner, E.)
・経験的語り→体験的語りと経験的語りの区別　（例、「戦場のロマンチックな月夜」）

さて、少し急いで話を進めます。ライフストーリーの構図はおおよそそんなものなんですが、じゃあ、その語られたものがすべてなのかというと、決してそうではない。先ほど言ったメタの話がありますが、語られることと語られないことというのがある、あるいは語り得ないことや沈黙とかがあって、語らないということがすごく意味を持っています。

私が例えばトランスクリプトを作るときも、沈黙はちゃんと入れます。だから、何秒間この人沈黙したかっていうのはわかるようにしていますね。今、IC レコーダーがありますから比較的簡単に秒数がカウントできます。その沈黙が非常な意味を持っている。ある意味では次の話が飛び出してくる契機になることがある。あるいは別の話題の転換であったりとか、ちょっとこれはしゃべれないなって話であったりとかですね、そういうものは比較的、沈黙なんかを見ているとよくあります。

ここではまず、語られるという、語るということについてなんですが、私は経験的な語りというのが大事だと考えています。語りにもいろいろあるんですね。昔のことをしゃべるにしても、「こういう体験をしました」というしゃべり方と、「あの当時は大変なんだよ、大変だったよ」「苦労したんだよ」とかっていう、いわゆる、さっき言った、評価とか判断とかを語る場合、あるいは、「あそこにはああいう人がいて、ここはこうなっているんです」という事実関係だけをずっと説明する語りとか、いろいろあるわけです。

で、経験的な語りと私が呼んでいるのは何かというと、登場人物、というのは自分でもいいんですが、「その時にはこういうことをして」というアクションが入っている語りのことなんです。これは実は大変古典的な社会言語学の一つの古典から引っ張っているものなんですね。アクションが入っている語りっていうのは、どういう意味で重要かというと当時、A1というアクションが起きたら、すぐに A2 というアクションが起こるという、行為の流れが決まってくるんですよ。言い方は悪いけれども、例えば「小学校のときに、喧嘩をしてね、それで、殴られて、骨折をして、病院に入ったんだよ」これはアクションです。“喧嘩をして、骨折した”というアクションです。骨折して喧嘩をしたわけじゃないんです。順番があるんです。骨折したのはそのあとなんですね。というふうにして、ある物語の展開があるんです。これは経験的な語りです。

ところが、インタビューしてくると、そうならない語りだってたくさんあるんです。特に、何か生き方を問うとかね。そういうふうなときには、現在の語りになってくる。現在の語りっていうのは、時空間は当時の語りのように聞こえるんだけれども、今の語りになってしまう。つまり、ある種の、「これはこう考えられるし、こうだったし、こうなんだよ。」と、具体的な展開が見えないままに、「大変だった」とか

「ひどかった」とか、「悲しかった」とかね、そういう感情で語る人っているんですよ。だから、それだと、「じゃあその時どうなさったんですか」と聞くんですが、一つの生き方、考え方みたいなものをぶつけてくる語りってありますから、それはそれで議論になってくるんですね。

考え方をまとめるためのインタビューというのはあるわけで、特に若い人の研究なんかを見ていると、マイノリティの人にインタビューしたという話を聞いていると、“自分をどう考えているのか”、“どういう生き方がいいと思っているか”という話を基本に、つまり考え方を知りたいんですね。だからそれはそれで一つの考え方としていいんですが、経験的な語りというのではない、と私は考えています。ここでは、さしあたり語りの種類があるということは、念頭に置いておいた方がよいと思います。

私は、人間というのは、さまざまな具体的な生活行動をし、経験をしながら自分の生き方なり考え方を鍛えていくという、非常に古典的な社会学的な発想を持っているんでしょうね。だからそういうアクションみたいなものがいかにこの物語の展開にしっかり入っているかっていうことをちょっと押さえたい。そうしないと、しっかり落ち着かないんですね。そういうところがちょっとあります。だから語りの種類があるということをちょっと押さえておいてください。

ここでは「体験的語り」って書いてありますが、これは私の今の関心で、今、戦争体験を聞き取るということをしています。あるいは戦争体験を語り継ぐという活動をしている人たちの話を聞くということをやっています。そうするとやっぱり戦争体験を今語るというのはどういうことなのか、というのを整理しないといけない、というふうに思っています。それで概念を、「経験的語り」と区別して「体験的語り」っていう部分を考えてみた方がいいんじゃないか、と今思っているところなんです。

実際に、少年時代に沖縄戦を経験したお年寄りの話を今聞いていますと、彼は島の南東の方でね、村から、首里から摩文仁の丘へ逃避行で逃げていくわけですが、その逃げていく日時というのがほんのつい最近、わかってくるわけですよ。話の展開の中にそれが入ってくるわけです。で、なんでその日時がわかったのかというのをちゃんと説明してくれているんですね。レジュメの、“戦場のロマンチックな月夜”というのは実はアメリカ軍の将校が日記に書きとめていた。ここを攻撃するので、この月が、今日はこういうロマンチックな満月だった、というのを日記に書きとめていたんです。ところが、その満月を、彼は逃げている途中のある場所で見るんですね。そこで初めて、この日と、この日記の日付と、彼が逃避行で逃げているときの日付が一致するんです。そして物語の全体の時間と空間配置ができるんですね。それが私にとってはとても面白い。彼は平和ガイドという仕事を始めて、若い人に語り始めて、この5，6年でこの物語を作り出したわけです。

そんなふうな背景がちょっとあって、じゃあやっぱりここの当時体験した部分と、後から自分の経験として作り出した物語とちょっと違うだろうというような発想で考えているというところです。

3.2 語りの素材と限界

・物質的記憶（モノ、写真、日記など）、心理的記憶（トラウマ、転機）、社会文化的記憶（伝承、モデル・ストーリー）→過去のリアルさをもった物語

それから、私が完全な構築主義者じゃないのはこういうところにも表れます。語りというのは自由にできるものじゃないんです。言語で語っても、語りって全部生み出されるものじゃないんだっていうのは私にはあって、そこにはやっぱり限界がある。

一つは物質的な記憶。かつてあったモノを見たり、それを語るのは今じゃないかと思われるかもしれないけれども、写真とか日記とか、当時のモノを参照しながらわれわれはモノを語る。だからそういう記憶が素材の語りにもなるし、あるいは、自由に語れるわけでもない。ある種の限界、証拠に相当するものなんですね。

それから、同じことは心理的な記憶、例えばトラウマ体験にもあります。これはこの後で言いますが、語れない体験があって、それがなんとか語れるとなると、言ってみれば一つそれを乗り越えるわけですから、まあ一種の転機として語っていくという考え方があると思います。

それから、社会文化的な記憶。これは伝承のような言い方がありますよね。それから、これもまた造語ですけれども、コミュニティの語り方。あるいはコミュニティの代表的な語り方が、ここでいうモデル・ストーリーという意味です。だからそういうものに影響されていろいろな語りを生み出していくというふうに考えます。

3.3 トラウマ的体験

・(Passerini, 1998) ファシズムに対する沈黙：トラウマ的体験、政治的無関心
・二人の「私」：「語り手」としての私と「物語世界」の私の同一化と差異化
・語ることができるのは、「転機」（回心、転向、翻身、alternation）となる経験：過去の「自己」→「自

己」の再生（セラピスト：古い自己物語の書き換え）

トラウマ的な体験というのは、簡単に言うと、“語る私”と“語られる私”というのがいるわけです。トラウマというのはまさにそれが分離できない状態ですよね。非常に簡単に説明してしまうと、突き放して語る対象にできない状態ととりあえず考えます。したがって、それから距離を置いていくことでやっと語りが生み出される。語りが生み出されるということは、それに距離を置くということと同値なんだと言っていいと思います。セラピーにおける自己の語りも同じようなことであるだろうと考えますね。

3.4「体験したものじゃないとわからない」

・体験の特権化

・語り手の神聖視（ヒーロー視）

それからもう一つ、語りがなかなか出てこない話で、こういうのもあります。これはある人が広島の被爆者に話を聞いた時のことですけれども、「体験したものじゃないとわからない。あなたに話してもわからないよね。」特に若い人、若い研究者だと、語り手からこういう話が結構出てきます。なぜこの体験が特権化していくんだろうという話でもあるんですね。

あるいは聞き手の側からみると、やっぱり“そんな大変なことを経験しているんだ”、“すごい”というふうに見えてしまう。無批判に、それをある種の神聖化していく、あるいはヒーロー化していく、特にマイノリティかなんかの経験なんて、聞く人はある種共感をもって聞くわけですから、文句を言えないわけです。むろん、それに対して批判できないわけね。それどころか、そうした話を期待もしていたわけですから。だから論文をまとめるときにその語りを中心にする。また、語り手にも気を遣わなきゃいけないわけです。もちろん気を遣うってことはしょっちゅうあるわけですが。そういうふうな神聖化する語りも登場してきます。特別な語りになるのか、あるいは、なかなか語ってもらないのか、ということですね。

3.5 聞き手のストーリー

いずれも、これは語り手の問題につきるのではなく、聞き手がどんな聞き方をしているかということも絡んでいることはちょっと押さえておかなければいけないと思います。

トラウマ的な体験のところで、イタリアのファシズム研究家のパッセリーニ（Luisa Passerini）という人の名前も出していますが、この人は、第 2 次大戦のイタリア・ファシズムの研究をしている。ところが、当時の市民に聞いてもなかなか語ってくれない。その前の時代は結構語ってくれる。そのあとは語ってくれる。ところが、真ん中がすっぽり抜けてしまう。その理由に二つあると。一つは、トラウマ的なんだと。もうやっぱり辛い体験だから喋りたくない、という感覚。もう一つは、あんまりよく知らないという言い方ですね。ところが、知らないという方の話は、どうやって聞いているかというと、ファシズムの話を聞きたいから聞こうとしているんだけど、語ってくれないと。他の話はたくさんしてくれる。当時の日常生活の話はいろいろしてくれる。ところが直接ファシズムの話はないわけです。だから、研究者の方はファシズムに直接関係することに気を取られ、その周縁的な話を聞き逃してしまっている。だけど、当時の人びとの生活はファシズム体制下の生活という視点からとても重要なはずなのです。さっきの被差別体験の話と同じなんですが、これ聞かなきゃ、と思っているので他の話をしてくれても、こっちも関心ないから、頭に入ってこないんですね。せっかくの語りがデータとしては消えてってしまっている。

そういう意味で、トランスクリプトを作るってとっても大事な作業でね、つまんないことですが、あれはやり始めるとね、ちょっと病みつきになる（会場笑い）。それから、もう一つ大事なことは、論文がいくつでも書ける。どういうことかというと、一回書いた論文があとかトランスクリプトを読み直すとちょっと違う解釈ができる。あらためて読み直したらちょっと違う読み方ができる、と思ったら次のものを書くわけですよ。でも前の論文が一応業績としては残るじゃない（会場笑い）。でも、それだけいいデータはものを言ってくれると思います。データ側からするとそういうことなので、自分の頭で加工してそこにデータを乗っけるんじゃありません。データに語らせればいいのです。そうするとね、論文はいくつも書ける。余計なことを言っていますが（会場笑い）。

4.モデル・ストーリーとマスターナラティブ（語りに内／外在するストーリー）

4.1 コミュニティのストーリー

あと、これは私の概念だと自分では言っているんですが、最近はもう比較的こういうライフストーリー研究者にはポピュラーになって、誰の概念か関係がないという感じで無視されているんですが（笑い）。マスター・ナラティブはまあ普通に使いますけどね、モデル・ストーリーっていうのは何かというと、そのコミュニティにさまざまな、いわば語り方っていうのがあります。だから、留学生だったら留学生のコミュニティがあって、ある種のコミュニティ的な言語の使用法がたぶんあるだろうと思うんですね。外国

人の人たちが持っている、ある種のコミュニティ内の関係。これもやっぱり人間関係ですよね。そこにある用語法というのがあります。これはまず基本を押さえておこうと思います。そのなかで典型的に語る語り方があります。日本社会の地域社会の中で、そういう典型的に語るストーリーの語り方があります。

4.2 全体社会に対するストーリーの機能

・モデル・ストーリー（ローカル・コミュニティ）とマスター・ナラティブ（支配的文化）の関係：被差別部落の「貧困・劣悪・悲惨」のストーリー＝マスター・ナラティブの「同化」ストーリー→「誇り・たくましさ・アイデンティティ」のストーリー＝支配的文化への「対抗的」ストーリー

例えば、被差別部落の中では、いわば解放運動のコミュニティ、反差別のコミュニティの語り方というのがあります。日本で、同和行政が出てきたところまでは、“貧しくて悲惨で”、“気の毒な”状況にあるから差別されているという、そういう語りでした。“コミュニティの中でもこんなひどい目に遭っているんだ”という語りです。その差別されているという語りは、同和対策事業を推進する機能も果たしました。ところが、同和対策事業が進んで、政治的に対策が進んだけれども、差別はなくなりませんでした。じゃ、どうなったか。生活条件は改善されてきたんですが、やっぱり差別はなくならない。それで「自分たちは悲惨な目に遭ってきました」と言ってたら、みんな自分たちを卑下するだけになっちゃうんです。じゃ、どうするかというと、プライドを取り戻さなきゃならない。これはアメリカの公民権運動と同じなんですが、それで、誇りを持たなければと。「われわれの文化っていうのはこういう文化があるんだ」、例えば、「芸能なんていうのは日本の今や伝統芸能となっているけれども、あれはもともとは被差別部落民が発祥なんだ」というような言い方が出てくるわけですね。そういうふうにして誇りの文化へ、コミュニティの言い方が変わるわけです。

だから、私が、あるときに太鼓屋さんをずっと取材して、一般的な集会ですね、そういうときに頼まれて発表しました。太鼓の職人さん、被差別部落の人が多いんですが、発表した時にタイトルが付いているわけです。そのなかにね、“たくましく生きてきた職人”というように“たくましく生きてきた”というフレーズが必ず出てくるんですよ。キャッチフレーズみたいなものなんですよ。どこを見ても、“たくましい”が氾濫している。私なんかは、“たくましく”っていうよりは、普通によくやっているなあ、という感じなんですが、それを表現しようとすると、従来のマイナス・イメージを反転させようとして誇張された語り方になるわけです。それはやはりそのときのコミュニティの語りなんですよ。だからそういうものがある。それが、一人ひとりの語りの中に登場してくるんです、語り方の中に。

自分たちは差別を受けて、こんな目に遭ってきましたっていうことが、その人の固有の経験なのか、ある種の被差別者というカテゴリーに該当する語りなのかっていう見極めをわれわれはしなければいけない。さっきカテゴリーが重要だって言ったポイントはそこにあって、自分の固有の経験なのか、コミュニティの経験なのか、それとも全体社会の語り方なのかっていうことは、一人ひとりの語りを丁寧に見ていくことによってある程度、腑分けができます。農村女性が語る、ある種の語り方というのは、女性特有のジェンダー的な語り方として位置付けられる。アメリカの研究者がやっていますが、そういうふうなことです。たぶんこれは日本に来た外国人の人たちが持っている、さまざまなコミュニティとかある種の語り方、あるいはこういうふうに言うと行政は受け入れてくれるとかですね、それを生活実践をしている語り手はもっているはずなんですね。そういうものを明らかにしていく。その代表的な語りの用法をモデル・ストーリーと呼ぶわけです。

4.3 個人にとってモデル・ストーリーがはたす機能

①マスター・ナラティブによる沈黙：対抗的なモデル・ストーリーの誕生
②沈黙から語りへ：カミングアウト（語りを促す機能）エンパワーメント
③モデル・ストーリーの惰性化：語り（モデル・ストーリー）の権力性：新しいストーリー生産への抑圧

個人にとってモデル・ストーリーが果たす機能がありますが、例えば、マスター・ナラティブによって沈黙させられるところに新しいストーリーが登場する。例えばセクシャルマイノリティのゲイの人たちが運動を起こすのは 1970 年くらいからですが、彼らがクロゼットから一般に登場してくるっていうのは、もう少し後になりますよね。そういう人たちが語れない、というのはこの社会のマスター・ナラティブである異性愛主義の中では語れないわけですよね。だけどコミュニティの中では、少しずつ、例えば、まあ、今でこそ新宿二丁目行けばどうのこうのという話ですが、わりと大学でも普通になってきていると思いますけれども、ちょっと前までは、二丁目とか特有な場所に行かないとこの語りはできない。今でも普通はそうかもしれませんが、だから、でも、そういうふうにして、対抗的な語りが出てくることによってですね、まあ言ってみれば自分が語り始めるということが可能になるわけです。だからモデル・ストーリーがあることによって自分が語り始めるということですね。

イギリスのゲイのライフヒストリーをやっている研究者で、ケン・プラマーという人がいて、レジュメ

に書いてあることなんですが、要するにそういうゲイのグループと出会う体験があって初めて語りはじめる、彼も最初にカミングアウトするのは、医者へ行って病気だというふうにその医者がが言わなくて、「いや、それはあなた全然問題ないんだから」というふうに言ってくれたことが非常に力になったというふうに言っていますけども、まあそういうきっかけで、彼はセクシュアル・ストーリーの研究をしていくわけですね。

モデル・ストーリーにはエンパワーメントというようなところもあります。でも実はモデル・ストーリーってそれだけではない。モデル・ストーリーがずっと続いていくとどんなふうになるかというと、例えば、被差別部落は典型的だと私は思っているんですが、ある語り方でないと許されない、ということが出てくるわけです。つまりマイノリティのグループの中では、運動的な側面を持っていますから、逆に言うと、他の言い方ではとても言えない。みんな一様な言い方になってくるんです。それをここでは「慣性化」という呼び方で言いましたが、モデル・ストーリーがある固有の経験を抑圧していく、ということもまたあるわけです。そういうふうに実はストーリーというのは動いていくものである。こういうコミュニティのストーリーと個人のストーリーという関係は、先ほどのケン・プラマーの考え方を参考にしたものです。

4.4 新しいストーリー誕生の契機

・高校へ入ったころ、私はまったく世間から孤立していた。……自分の世界に閉じこもり……生活のなかで唯一目標としたのは、私がゲイであるとさとられるものをすべて隠すことであった……自己欺瞞が始まった。……私は公然とゲイを名乗る人がいることを知らなかった。……私は両親とともに……日帰りの旅行をした。そのとき、いっせいに叫んでいる声をぼんやり聞いた……いっせいに声をそろえて繰り返し叫んでいた。「ゲイであることに誇りを」「ゲイであることに誇りを」。(プラマー 1998:108)

・女性運動における CR(consciousness raising)

・在日朝鮮人の語り（高校時代に、出入国管理法案、靖国神社法案などの勉強をして、民族運動に目覚めていく自己の語り「だんだん潔癖、聖人君子のようになりだした」→民族運動に参加している人たち：「面白くない」「がり勉の」「真面目な」人びと→民族運動のモデル・ストーリーへの距離化

ここにケン・プラマーの例が引いてあります。「新しいストーリー誕生の契機」と書いてありますが、これは契機というよりは、上（4.2 節）のストーリーの機能に相当することかもしれません。それから、ちょっと古いですが、コンシャスネス・レイジング(consciousness raising)とかですね、そういうグループ活動、セルフヘルプグループの活動なんかもみんなそれに当たるものだろうと思います。

それから、そういう語りの中で、自分で新しい語りが生み出される例としては、私は本の中でちょっと使っているものなんですが、ある在日朝鮮人の語り。彼は高校時代に民族運動に目覚めるわけですね。どんどん入って行って、日本人を敵視していく。ところがある時から、それが変わるんです。どういうふうに変わっていくかというと、語りがね、「だんだん潔癖、聖人君子のようになりだしたんだよ」っていう言い方に変わっていくんですね。つまりどういうことかというと、自分が語って、物語を語っていながら、その当時の自分っていうのはなんか潔癖で聖人君子でちょっと嫌なやつなんだよね、っていう語りになっていくわけです。それが今の自分との対比で出てくるわけですね。そういうことによって一種の民族運動への距離化を表明していく。「面白くないがり勉の連中と一緒でね、自分たちが遊んでた悪ガキを当時は馬鹿にしていたんだけどね」って言いながら、結局そこへ戻っていく。そのことによって民族運動の語り方というものから、自分なりの語り方を見出していこうという、そういうものが登場してくる可能性がある。そういう、言ってみれば、ダイナミックなプロセスが語りにはある。個人の語りというのは社会、あるいはコミュニティと非常に深く浸透し合っていると。

そういうものを踏まえて解釈をしていく、こうした枠組みが、いわば解釈の一つの手掛かりになるのではないかというふうに思っております。以上です。

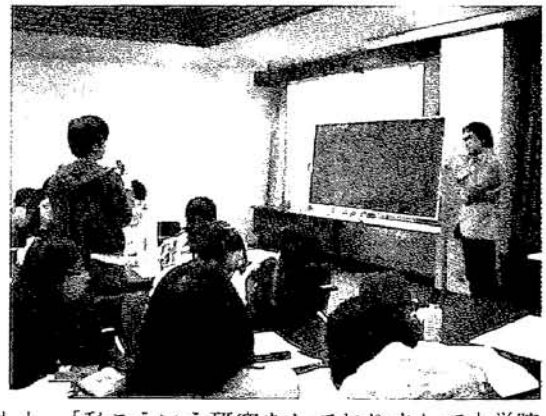
5.質疑応答

5.1 質問①インタビュー前の契約をどうするか

司会：どうもありがとうございました。これから質問を受け付けたいと思います。

先生の方からはどんな質問でもいいという温かいお言葉をいただいております。先生も日本語教育の方に向けて講演をなさるのは初めてということで、みなさんがどんなニーズをお持ちで、どんなことを知りたいと思っているのかが手探りだということもおっしゃっていましたので、どんな質問でもいいので投げかけてくだされば、ということです。こんなこと聞いていいのか、などと思わずに自由にご質問を寄せていただければと思います。

質問者1：ありがとうございました。私は日本言語文化学研究会の会員ではなくて、ジェンダー社会学専攻の修士2年生の者[3]です。



私の質問は方法論に関することです。インタビューのなかで、実際にインタビューを取るときに、私のインタビューした内容を修士論文に載せますよ、載せるかもしれませんよということを、どの程度まで語っていただく側にお伝えすればいいのか非常に迷ったんですね。私の場合は、学んだ方法論が米国型で、きっちり書類を準備してしまうので、ものすごい長い文書を準備して、「あなたの情報はこのように守られていますから大丈夫です」だとか、ずらずらっと長い書面を準備して申し込んだら、すごく相手を委縮させてしまったんですね。もともと、「私こういう研究をしておりまして大学院に所属しておりまして云々」、という時点で、堅そうだなというイメージを与えているのに、書面を準備したことでさらに相手を委縮させてしまい、堅苦しいものになってしまったのが私の失敗談としてありまして、そういうことを桜井先生はどのようにやってきたか、または学生の指導の場においてどういうふうに指導なさってきたかということをお伺いしたいです。

桜井：最近そういう契約といいますかね、アメリカから入ってきている部分もありますが、お茶大はよくやっていると私は思っていますけれども、実際アメリカ、シカゴ大学の大学院の学生が来ていたときに、被差別の人たちに話を聞いたときに、「ちょっとデータ取っておいたら？」って言ったら、「まだ許可が出てないから調査できないんです」と言われたときに、そうなんだ、と思ったんですが、あの、基本的に文書で書いて出すっていうことに対してはありですが、まあ相手にもよるんです。

特に私なんかは年配の人たちがこれまで多かったというのもちょっとあるんですけれども、まずそれを出すことが果たしてどの程度効果的なのか。例えばハンセン病の患者さんのところで、これはグループでやったんですけれども、大規模な調査でやったんです。この時は法律がもうできていたので契約関連の署名で渡しましたが、私が基本的にやっているやり方はこういうことです。書面でやるというのは契約社会のアメリカではいいかもしれない。それは1970年代からアメリカはやっていますが、日本では今のところ通用しないと私は思っています。そんな堅苦しいことをやり始めるとインタビューの場が公式の場のような硬直した場になってしまう、というふうに正直思っています。今の若い人たちだったら、これからの時代には比較的いいかなあというふうに思っていますが。

それで基本は、口頭で伝えます。口頭で伝えると同時に、録音の許可を取りますね。その時に、約束事を録音の中に全部入れるようにします。それは最終的に本人に返しますから、若干は編集するけれども語りはほぼ言葉の通りに返しますので、そのままOKであればね、そのまま続けて、いずれ渡すという形になりますよね。だから修士論文に使えたらということであれば、使わない場合もあるわけなんですよ。逆にデータを使うと言って喜んで引き受けてくれた人のデータを使わなかったらこれも困ります。「すみません、使っていません」って言って出すのはおかしな話でね、だからちょっとそれは、後からの話になりますが、「聞いたものはちゃんとトランスクリプトをして、お見せします」、「また使うことがあるかもしれません」くらいの断りは入れますよね。だから、基本的に私はそうしています。

ただ、書類で出すことも必ずしもおかしいことじゃないけど、仮にそれを両方がハンコを押して持っていますよとかね、そういうことをやり始めるとちょっとどうか、もうそれだけで嫌だっていう人もたくさん出てくると思います。ただ、やっぱり人間関係というものに重きが置かれたのが日本社会のある種のあり方ですから、逆にしっかりと話を聞いて、そしてそれを常に返していく、あるいは連絡を取ることが大事です。今までフィールドであの人にあれだけしゃべったって言うと、なんか論文を書いたのかどうかよくわからないけどインタビュイーには何の連絡もないとかね、そんなのたくさんありますから、それだけはしっかりやれば大丈夫だと思いますね。多少のトラブルは、関係を持っている限り、かなり解消できるようになります。そのぐらいの信頼関係でインタビューはしていかないとまずい。

質問者1：ありがとうございました。

5.2 質問②ライフストーリーとライフヒストリーの違い

質問者2：本日のご講演ありがとうございました。私は大学で研究をライフストーリーの手法でやっておりまして、今回はこちらの会の会員でないのですが参加させていただきました。

私がライフストーリーという研究方法をこれまでやってきて、ライフヒストリーとの対比の中で、自分がライフヒストリーとライフストーリーとの違いをどこにおいてライフストーリーという言葉を使って

きたのかというところでちょっと行き詰っているところなんですね。それで、いろんな方がいろんな区別を設けたり、ほとんど混同して同義のように使っていたりする状況があるんですけれども、桜井先生のご著書も拝読いたしまして、そのライフストーリー研究におけるライフストーリーという言葉と、ライフヒストリー研究におけるライフストーリー研究という言葉を同じように使ってよいのかということと、ちょっと用い方が違うというような、私の取り方がもしかしたら。

桜井：えっと、ライフストーリー研究におけるライフストーリーってどういうことですか。

質問者2：一次資料というような位置付けがなされていたかと思うんですが。ライフヒストリーを構成する要素というような位置づけがなされていたかと思うんですが。

桜井：ライフヒストリーというのは、非常に単純に言ってしまえば、誰でもライフヒストリーはあるんです。われわれみんな自分のライフヒストリーを持っているんです。でもこれを語っていない限りはこれはライフストーリーにはならないという単純な事実ですね。だから、金魚にもライフヒストリーはあります。でも金魚にはライフストーリーはない（会場笑い）。という使い方でいいんです。

昔のライフヒストリー研究は、昔はっていうか今もそうかもしれないけど、基本的には実証的なスタンス、リアリズムのスタンスです。どっちかっていうと実証的。だから例えば日記とかいろんな文書資料を使うわけですよ。で、文書資料を使うんだけど、それが正しいかどうかを、一応、チェックを客観的な資料と重ね合わせてやっていくわけ。それをずっとやってきたんです。ただ、今は、ライスヒストリーと言いながらライフストーリー研究、まあ、口述なんかでインタビューして、それをデータにしているわけだから、基本的には同じですね。で、ちょっと微妙なことを言いますと、人の人生を著そうとして「彼のライフヒストリーは……」とはいえますが、「彼のライフストーリーは……」となると、彼の語りを基本的には指している場合だけです。その人が話してくれたことだけをもとにまとめるなら、ライフストーリーと言っても間違いではないわけですが、ライフヒストリーとはもっといろんなものを全部含めて、その人の生命・生活の歴史を考えているんですよね。

それからもう一つは、私の定義でいうと、ライフヒストリー研究というのは、研究で使うライフヒストリーというのは、研究者がある意味では構成したものなんですよ。だから、その人の語りも入っているけど、文書も入って客観的な事実関係も入っている、そういうのがライフヒストリー。だから、伝記を考えてくれるといいけど、伝記作家が書いていくときに、ある意味でいろいろなものを突き合わせながら事実を積み重ねますね。あれがライフヒストリーに近いですね。だからあくまでも、ライフストーリーっていうのは当事者の語りがメインになった構築物です。

質問者2：ありがとうございました。

5.3 質問③ライフヒストリー「法」とは

質問者3：日本語専門学校で日本語を教えている日本語教員です。

ライフストーリーとライフヒストリーのことなんですけれども、もしここに、研究法として、「法」という言葉をつけた場合、どのように違うか教えていただけますでしょうか。

桜井：うーん、いや、今話したこととほぼ同じなんですが、ライフヒストリー法っていうのは、先ほど言ったように研究者、これまでの歴史的な背景から言うとね、今ライフヒストリー法って言っている人が必ずしもそうであるということではないんです、ライフストーリー法と同じ人もいますから。だから、たいていはライフストーリーって言っているわけです。ライフヒストリー法っていうのは、研究者がある意味でその人自身の個人史、伝記をまとめるっていう考え方で捉えていいと思います。ただ昔は本人がずっとしゃべったのをまとめて、それをライフヒストリー研究っていう場合はありましたよ。でも今、ちょっと分けるとしたら、ということです。わかりにくいでしょうか。

質問者3：あの、先生のご著書の『インタビューの社会学』の中で、「ライフヒストリー法」という言葉が書かれておりまして。

桜井：最初の先行研究の整理をしたところですね。主にそれは実証的な研究のつながりの中ではずっとライフヒストリー法だったんですよ。だからライフヒストリー法っていうのは今言ったように、当事者の語りだけではなくていろんな資料を使ってもOKであった。で、今ここではライフストーリー、つまり当事者がどう考えているのかを聞いて、それを基本にしたものをライフストーリー研究と言っています。だからそういう意味では、広い意味でライフヒストリー研究という研究法の中にライフストーリーっていう研究法があると考えてもいいかもしれませんね。そういう言い方をしていたかもしれません、その本では。

5.4 質問④聞き手と語り手の関係

質問者4：比較社会文化の音楽を研究している＊＊と申します。

先ほどそのインタビュアーの聞き方によって、相手の語り方が変わってくる、その語り方が変わってくるのに対してまたインタビュアーが気づきを得て聞き方が変わるとか、もしかしたら聞いているうちに研

究テーマが変わってくるとかいうことがあるだろうと思うんですけれども、ナラティブという手法の中で積極的にインタビュアーが変化していくこととか、関係が変わっていくということにまで踏み込んでいるものとかそういう手法というのはあるでしょうか。
桜井：そういう論文ということですか。
質問者4：ナラティブというのはそういうものを研究対象にするものなのか、そこまではしないものなのか。
桜井：あります。変わっていくというか、出版物というのはどうしても限界がありますのですべてのプロセスが見えるようになっているか、意識して見えるようにしてくれているか、ということによってちょっと変わってしまうんですが、例えば、小倉康嗣さんの『高齢化社会と日本人の生き方』、慶応大学出版会が出していますが、本も分厚いものなんですが、彼はかなりの量のインタビュートランスクリプトを載せています。3人しかインタビューしていないんですけれどね。2回やっているんですよ。それだけしかやっていないんだけれども、会話のやりとりそのものが変化していく、あるいは後で気が付いていくとか、そういうのが比較的見える本だと思っていて、ちょっと面白いところをちゃんとやっているなと思っています。だからそういう研究が可能になるということですね、自分自身が研究の対象になりうるということを積極的に言っておきたいと思います。
　そういう論文は先ほどちょっと例を挙げましたが、ラインハルツとか何人かの人たちのなかに論文もあります。ジェンダースタディーズでは大変有名な研究者です。

5.5 質問⑤聞き手が主導・解釈してよいか

質問者5：お茶の水女子大学の＊＊と申します。今日は興味深いお話をありがとうございました。
　私は談話分析で会話を研究している者なんですけど、日本人は物語と繰り返しでコミュニケーションが進んでいて、話し手主導という論文を読んでいるところなんですけれども、それからいくと、私も心当たりがあるんですが、物語世界だけで、インタビューしているときに、話し手主導にしてしまうと終わってしまいそうな気がするんですね。そのときに、こちらの方で言葉を用意して「それはこういうことなんですか」とか、まるでマークシートのような方式で相手に出させてしまって、そうしたら相手に「そうかもしれませんね」とか、「そうなんです」とか言わせて、結局聞き手主導でまとめやすくしてしまうみたいな、そんなふうなやり方を、今考えながら聞いていたんですね。先生の考え方だと、相互の関係によって提示するということなので、そういう場合はどうなのかなと思ったんですけれども。
桜井：談話分析の場合、いわゆるディスコース分析の場合はその人の語りを分析しますよね。だから言うなればインタビュアーの語りを、聞き取り、今言ったように、「こういうことなんですね」と確認を求める質問を発するわけですね。で、本人が「うーん」とか言うか、「はい」って言うか、受け流すかよくわからないけれども、単純に「はい」って言ったから賛成しているってわからないでしょう。だけど、そのプロセスをちゃんと書くということですよね。だから、そこでインタビュアーがそういう質問をしているにもかかわらず、あるいはまとめやすいように変えているにもかかわらず、そのインタビュアーのその辺を無視してデータだけ取ってきて、「こうやってまとめました」っていうのはおかしいです。だから逆に、インタビュアーの質問を踏まえて談話分析をしてくれればいい。だから、インタビュアーの確認の作業を無視して、その当事者の語りっていうのだけをまとめるのは、やはりいささか問題があるという考え方ですよね。ただ、往々にして論文をまとめやすくするためにそういう作業をしてしまうということはありますが、ちょっとそれは、微妙です。だから私なんかは、インタビューのトランスクリプトそのものを見せるように言っちゃうことがありますよね。勝手な解釈しているんじゃないの、と。そのやりとりが見えないとその解釈のプロセスが見えないっていうのがあるような気がします。

5.6 質問⑥「一般的な語り」しか出てこない

質問者6：お茶の水女子大学で地理学を専攻している者ですが、先生の話の中に、戦争体験の体験的な語りの仕方が出てきましたが、私はフィールドワークに行ったときに難しい問題がありました。
　私は満州開拓帰還者の話を聞きたかったのですが、実際に行ったら、私はまだ、自分は何の調査をしているか、目的は何か、まだ一切説明していないんですけれど、相手は自ら語り始めたんですよね、だから語ってもらった内容はほとんど本の中に書いている、図示化されたもの、一般的なものなんですよ。私は行く前に、その方はきっとつらい体験、つらい経験をしていらっしゃったと予想して行きました。その部分について一番聞きたいんですよね。しかし、その方は私から見ると美しい言葉しか語っていないので、そういうときはどういうふうにしたらいいのかすごく悩んでいました。
桜井：まあ、インタビュアーの問題ですよね（会場笑い）。そういうことはよくあります。どこかで発表されている分はもう既に、しゃべっている経験がたくさんある人がいますよね。だからそういう人はあるパターンで話をしますよね。だからもうどこかで聞いたような話しか出てこないわけです。そこにどうい

うふうに突っ込んでいくのかっていうのがあるわけです。でもそれを無理やりやると、怒らせたりします。私は怒らせました（会場笑い）。差別の問題を聞きに行って、その差別の問題にかかわったある女性の方が相手をしてくださったのですが、私が聞こうとしていたのは、そういう差別の問題ではなくて、その人が他所からお嫁に来てどんな暮らしと生活をやってきたか、それを聞こうとしたんです。だけど、本人は、一生懸命語りたかったのは、自分がいかに頑張って運動をしてきたかっていうことだったんです。それはよくわかるんです。女性としてそこまでやってきた人は少ないわけですから。だからそれを語らなきゃいけないのに、こっちは別の、「それはあれとしてこっちはどうなんですか」と聞くので、最後は怒っちゃって、それは本にも書いたんですが、「警察の尋問みたい」と言って怒って帰っちゃって、私があわてて「ごめんなさい」って言ったんですが。それで何年か経ってそこの村に行ったときにちゃんと挨拶に行って、そしたらちゃんと家の中に呼んでくれてね、「覚えていますか」と言ったら「覚えている」と言って、「もう一回しゃべりません？」と言ったら「もう絶対いやだ」と言うんです、その人（会場笑い）。でも和気あいあいとしゃべりましたけれどね。だからそのデータは非常に気になって、何であの人怒ったんだろうかって最初わからなかったんですよ。でもトランスクリプトをずっと見ていくと、やっぱりその人の語りたいことがあったわけですよ。で、それを私は聞かないで、他の聞き方をしたんですよ。だから無理をするとダメなんですよ。でも、インタビュアーがどういうふうにその間に入っていくかということがとても大事なんですね。それが意外に、そこでちょっと、ボタンを押すと、全然違う語りが登場してくる可能性があると思います。それはこれからいろいろと研究して（笑い）。

それからもう一つ、今の話の関連で、あるコミュニティに入ると、もう既に調査でいろんな人が来ているわけですね。もうある意味で半分被害に遭っているみたいな部分があるんですよ。で、そうすると約束した人が出て来て、型通りの話をしてくれる。だから、ライフストーリー、被差別部落に入ったときに、ある村に行ったら、そこの役員さんに「話を聞きたい」って言って入ったら、まず何をしゃべり始めたかというと部落史の話です。いかにしてこの村が出来てきたか。私たちの関心はそこにないんですが、それを滔々と2時間聞いたうえで、やっと本題に入るわけです。だから、そんな世界ですよね。

5.7 質問⑦語りはなぜ特権化されるのか

質問者7：東京大学臨床心理学コース修士2年の＊＊と申します。今日は貴重なお話をありがとうございました。

先ほどのご質問に感想なんですけれども、その場で典型的な話が出てくるっていうことにも、なんか意味があるのかなって気が私はするんです。あえてそこで典型的な話をする意味もあるかなと、言語化はなかなかできないんですけれども、そういうことを先生にお聞きしたいです。あと、講演の中で興味を持ったのは、体験の特権化という話です。私は臨床心理をやっているので、この先クライエントさんから、「あんたに私の気持ちがわかるのか」みたいなことはおそらく投げつけられる一言であろうと思うんですけれども、この体験の特権化に、どういうものが関わってくるのか、どういうような過程で、この語りが特権化されていくのか、先生はどのようにお考えになっているのかというところをお伺いしたいと思います。

桜井：典型的な語り、私の言葉でいうモデル・ストーリー的な語りというのは、それが出てくる背景があるのだという考え方もできるんだと思います。先ほども言ったように、私がちょっと失敗した例でいうと、やはりその人はそれを語りたい理由があったんです。背景があったわけです。ただ、基本的に調査をしていく流れの中で、“これはどこかで聞いた話”というのではね、そのテーマにもよりますよ。その人を見たい、ということであれば、もちろんそこでどう関わるかということが関係しますが、“この村”とか“このカテゴリー”とか、そういうことを考えたいというときに、その人にずっとかかずらわっている時間がないかな、というくらいです。だからもちろんその文脈によっては、非常に重要な意味を持っている場合がある。だけど、すべてではない。

例えば、ある方に、昔の話を聞いたときにね、「だいぶ苦労しました。私は本当に苦労したんです」。なんかちょっと具体的な話をすると、全部そこに戻ってしまうような語りは、物語にならないんですよ。ただ物語を構成できないという場合がありますので、すべての人が必ずしもいい語り手ではない、ということは現実としてあるんだということですね。

それから、特権的な語りについては、これは、考え中です。わからない部分がある。ただ、われわれとそうやって距離を置いてくるものっていうは一体何なんだろうという問いかけは常にわれわれに戻ってくる問いなんですよね。だからそういう意味で、ひょっとしたら、その年代、あるいはそのジェンダーじゃない人、最初の印象の中で、本人の中で、“この人じゃない人だったらいけるかもしれない”という可能性はありますから、どうしてもその人に聞くのであれば、ちょっと違う場面構成とかを考えてみる流れの中で、一つ試みをしてみるっていう手はあるかなっていうのは、私なんかの思いではあります。ただ、そうはいっても何かを語ってくれますから、その何かを語ってくれることのものから、わからないという

意味をどういうふうに構成していくかという作業になっていくと思います。今の段階では、ちょっとそれ以上は……。

5.8 質問⑧社会学のライフストーリーと心理学のライフストーリーの違い

司会：他にいかがでしょうか。そろそろもうお時間も過ぎてはいるのですが、後お一つくらいでしたら。

質問者 8：遺伝カウンセリングの＊＊です。今日はありがとうございました。

私自身は今遺伝カウンセリングという領域で、カウンセリングの一種をやっているんですが、そのなかでライフストーリーで研究をするときに心理の方のライフストーリーというか、ナラティブに近いライフストーリーと、桜井先生がおっしゃっている、社会学の方のライフストーリーの違いがわかりにくいけれども実は大切というか、端々に効いてくるなということを感じまして、今この場を借りて整理を手伝っていただきたいんです。

社会学の方のライフストーリーっていうのは基本的にはその、社会もしくはある種の集団のありようをやはり最終的には知りたい、けれども、一般の研究では例えば被差別者の方がいて、研究者がその方から被差別の体験を聞きだして、それがその集団が経験している社会のありようであろうと考えるけれども、ライフストーリーの場合には、被差別者たちが話す内容というのは、その被差別体験もあるし、そうではない体験というのも一つラインとしてあって、その他に、聞き手と語り手との関係の中で、もう一つ社会に向かってアクセスする枝が伸びているのかなというふうに私は理解をしています。ただ基本的には社会のあり方を見るというところに一番中心があるのかなというふうに思いますが。

桜井：だいたい今おっしゃったことでいいわけです。私がこだわっているのは、そういう人々が持っている、本当に個人的な語りっていう部分もあるし、その語りの中に、いくつかのコミュニティなり社会というか、そういうものが反映している場合もある。ただいずれにしても、そうした個人的な語りを通してその社会なりコミュニティなりを見ていこうっていうスタンスはありますよね。だから、その一番最小単位はインタビューという相互行為の中にも社会があるというふうに考えているわけで。だいたいおっしゃる通りだと思います。

質問者 8：それで、心理学だと、今度はその構築主義というか、聞き手と語り手の方がずっと前面に出て、比重が重くなってきて、その語り手の人が経験している社会が何なのかというよりも、それがどうやって語られたのか、どういうインタラクションがあって、語りが出てくるのかっていうところに重点を置くのが心理学のナラティブだったりライフストーリーだったりするのかなというふうに思うんですね。

桜井：心理学もさまざまでしょうから、どうなんだろう。そうですかね。心理学の場合は、言ってみればそういう語りを通した自己であって、社会はその背景でしかないでしょう。

質問者 8：そうですね。

桜井：だからいわゆるセルフストーリーと言いますか、自己をいかに捉えるかということなので、心理学といっても誰が、という話で、やまだようこさんとかいろいろ出てくるけれども、インタラクションをどの程度重んじているかとか、共通理解にはなってきているのかわかりませんが、非常に境界はあいまいですよね。

質問者 8：境界があいまいな中で、一人ひとりの語り手に注目していくのか、語り手が所属している社会の方のあり方を見ていくのかというあたりが実は結構違うのではないかなと最近思うようになっています。

桜井：そうですか。難しいけどね。まあ、私が心理学をよく理解していないかもしれない。ただ、自己概念、自己を統一的に見なすとか、もちろんアイデンティティなんていうのは社会学の基本でもあるんですけれども、心理学にもそういうのは関係すると思いますし、その辺はある部分、大変共通しているかなとも思っています。

質問者 8：そうですね。

桜井：私が比較的、社会の側面が強いんですよ。今の若い研究者はもう少し自己、その辺の関心が強い人が多いかなという気がします。

質問者 8：ナラティブセラピーの方の自己の語りを変えるっていう話と、ライフストーリーの方の話とが、違いがわからないとか、何が違うのかとかいう話を結構耳にするものですからそのあたりの話を伺いたかったんです。

6.おわりに：司会による総括

司会：ありがとうございました。質問も尽きないかと思いますが、時間を 10 分以上超過しておりますので、そろそろ終わらせていただきたいと思います。

今日は多くの方にお集まりいただき、ありがとうございました。保育や医療、音楽、心理、日本語教育

と、さまざまな分野の方がこうやって同じ場所に集まって、人が語るということを一緒に考えられたこと、それ自体が本当に意義のあるように思いました。自分は日本語教育を専門としておりますが、自分も日本語教育という文脈に引き付けた場合、私たち日本語教師はあまりに、教室で、学習者である彼らが語る、その内容にあまりにも無関心であるように思いました。今日、先生のお話を聞きながら、彼らが語る内容、それは文型や言葉がどれだけきれいかとか、そういったことではなくて、彼らが語る内容そのものに耳を傾けて、それが私と彼らのどんな関係性の中で生み出されているものなのか、あるいは生み出されていないものなのかに、もっと意識的でありたいと思いました。そうした意味で、警鐘に似たような示唆をいただきました。どうもありがとうございました。(拍手)

注

1. 当日は研究会会員・非会員合わせ 90 名の参加があった。
2. 当日配布のレジュメはこの講演録の本文中に適宜挿入した。
3. 以下、質問者の氏名は伏せて記載する。

参照文献

小倉康嗣 (2006)『高齢化社会と日本人の生き方 —岐路に立つ現代中年のライフストーリー—』慶応義塾大学出版会

桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房

桜井厚・小林多寿子 (2005)『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門—』せりか書房

山本佳世乃 (2009)『遺伝カウンセリング学の構築に関する一考察』お茶の水女子大学博士論文 (未公刊)

Bertaux, D.(1997) *Les récits de vie : perspective ethnosociologique*, Paris: Éditions Nathan. (小林多寿子訳 2003『ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティヴ』ミネルヴァ書房)

Butler, P. (1997) *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, NewYork & London: Routledge.(竹村和子訳 2004『触発する言葉—言語・権力・行為体—』岩波書店)

Passerini, L. (1998) Work ideology and consensus under Italian fascism, In Perks, R. and Thomson, A (eds.), *The Oral History Reader*, London, Routledge, 53-62.

Plummer, K. (1995) *Telling sexual stories: power, change and social worlds*, London ; New York : Routledge. (桜井 厚・小林多寿子・好井裕明訳 1998『セクシュアル・ストーリーの時代—語りのポリティクス—』新曜社)

Reinharz, S. (1992)*Feminist methods in social research*, New York : Oxford University Press.

さくらい　あつし／立教大学
asakurai@rikkyo.ac.jp